

大晦日のローストビーフ

23の物語

秋山ちえ子



文春文庫



文春文庫

大晦日のローストビーフ 23の物語

定価はカバーに
表示してあります

1989年10月10日 第1刷

著 者 秋山ちえ子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-751801-5

文 春 文 庫

大晦日のローストビーフ

23の物語

秋 山 ち え 子



文 藝 春 秋

目 次

菜心と姑娘ツオイサム クーニヤン

9

珊瑚礁の島で

19

パンとバターとからゆきさん

30

津軽じょっぱり

39

「プラカ」で会った女ひと

51

メコンデルタの元日本兵

62

プノンペンの朝食

73

小笠原密入国・第一号

84

涙いっぱいシャンパン

94

女神様の飲み物

103

ビールと愛の反戦歌

113

ベドウィン族のもてなし

123

沖繩そばとかわいい女 135

片目の戦争花嫁 148

「アパさん」のてんどん 157

妻は異国の人 167

岬の家の人たち 176

葡萄祭の日 189

おじやと不良少女 199

私だけの物語 210

アントニオ家のクリスマス・イブ 220

女二人の地酒 230

大晦日のローストビーフ 241

あとがき 252

单行本 昭和51年7月文化出版局刊

大晦日おみそかのローストビーフ

23の物語

ツオイサム
クニーヤン
菜心と姑娘

中国・広東

「菜心」——^{カントン}広東語では「ツオイ サム」と読む。中国の他の地方にもあるが、広東で栽培されるものがよいといわれている野菜である。

アブラナ科の植物の花が咲きかける前の芯^{しん}を摘んだもので、菜種の花のような黄色い花びらがのぞく小さい蕾^{つぼみ}をつけていることがよくある。これを強火で油いためにして食べるのが美味しい。油っこい中国料理の間に「菜心」がはいると、口の中がさっぱりする。

たまに香港にゆくと、戦前のつきあいが続いている知人の陳さんは私が菜心が好きなことを知っていて、料理の頃合いを見計って、特別にこれを注文してくれる。

「アンタ、ドウシテコンナモノガスキ? ビンボウナヒトガタベルモノヨ」

「イロガキレイダカラスキ? アンタ、オモシロイヒトネ。菜心や芥藍(カイラン、茎だけ食べる青い野菜)ハ、日本人ハシラナイヨ」

私は陳夫人の言葉を笑顔で受けとめる。が、菜心は、私にとって美味しいものだけではない。とりかえしのつかぬ若い日のあやまちを思い出させるものでもあるのだ。

中国の広東に私が住んでいたのは昭和十五年の十二月から十七年の四月までだった。

二十三歳の私にははじめての外国であり、周囲のもの何もかもがめずらしかった。

十二月から一月、二月にかけての広東は一年中で気候が最もよく、緑の木々が生き生きと茂り、ハイビスカスの花が日本の花には見られぬ鮮やかな紅を誇っていた。見事な青磁の皿や壺、黒檀、紫檀の台が無造作に道端で売られていた。子猫と同じくらいの大きさのドブネズミを見た。市場では豚の鼻だけ、足だけを並べている店もあった。

町の真ん中に日本兵のための「慰安所」もあった。行列している兵隊を見て、私は何かの配給がされているのかと思ったが、それは食料や衣類ではなく女性の配給であった。

物めずらしさが先に立って、戦争中であつたことも忘れがちの生活だった。

その頃、日本人の家庭ではどこでも中国人の使用人がいた。私の家にも「姑娘」^{グレイニヤン}が一人世話されてきた。彼女を連れてきた先輩の奥さんは言った。

「この娘はウメちゃん。月給は五円やって下さい」それから声をひそめて、

「信用しちやいけませんよ。シナ人はみんな嘘つきで泥棒ですからね」と言った。

「まさか、そんなひどいこと……」と、一応はその言葉を否定したが、その後の「ウメちゃ

ん」に対する私の態度は、あの奥さんの言葉にかなりひきずられていた。

自分でしまい忘れた財布でも、探す前にまず「もしかしたら彼女が……」と思った。長男が生まれて母乳の出が少なくなった。「ウメちゃん」は休みの日に家に帰った時、母親と二日ばかりで作ったという土鍋で煮こんだ食物を持ってきてくれた。口では「ありがとう」と言うが、あとで私はそれをそつと捨てた。何を食べさせられるかわからないという疑いの心のほうが強かったのだ。

「ウメちゃん」は器用で毛糸編みをすぐに覚えた。次々にチョッキやスエーター等を編んだ。が、その時も私は、彼女が毛糸をごま化しはしないかと思った。

料理も上手な娘だった。私は彼女から広東式中国料理を習うようになった。

「菜心」の油いためもこの頃覚えた。

広東の女性は男性より働きものであった。朝早くから天秤棒てんぺんぼうの両端に野菜や果物を入れた籠かごをつけて、声高々と売り歩くのも女性たちであった。

毎朝、いちばん早くきこえてくるのが、「売菜町（マイ ツォイ、アー）」——「菜っぱはいらんかね」という、菜心売りの声であった。

社宅の三階のベランダからのぞくと、はだしの女性が腰で調子をとりながら通ってゆく。荷がゆれる。そのたびに「菜心」の葉に残る水けが朝の光の中できらめく。

「きれいな菜っぱ！ ウメちゃん見てごらん」

「菜心ハオイシイヨ。オクサン買ウカ？」

彼女はベランダから黄色い声を張りあげて野菜売りを呼びとめた。

それから週に何回か我が家の食卓に菜心の油いためたものがのった。広東を去る日まで。

「粽子（ツォン ツ）」の作り方も覚えた。もち米の中に油でいためた豚肉やハスの実やアズキ等をまぜ、大きなハスの葉で包んで蒸したものの。日本のチマキの変形を想像していただくといい。クルミとゴマで作るおしるこも楽しいものであった。

「ウメちゃん」の日本料理も「てんぷら」「魚の照焼き」「親子煮」等、レパートリーはふえていった。

「ウメちゃん」と私の人間関係は食物のことでは最上級によいものになった。しかし相変わらず買物に行かせるたびに「ごま化しはしないか」と疑いの目で見てしまう。日本軍が広東に入城した時、彼女の一家がいかにして生きのびたかという話等になると「本当かな？」と、割引をしてきいた。親戚に不幸があつたから休ませてくれと言われると、やめるためのウソではないかと、まず思った。

広東の生活は約一年半で北京に移ることになった。

「ウメちゃん」は私にとりすがって泣いた。

「オクサン、一緒ニイクヨ。ペキンデモトウキョウデモイクヨ。オカアサンモ、イクイイイツタヨ」

私の心は既に未知の土地北京、中国文化の中心地である北京にとんでいた。「ウメちゃん」の気持をそれほど深く考えることもしなかった。

「オクサン、コレアゲルヨ」

別れの前日に彼女は三人分の「香雲紗（シャン ウン サ）」——表が黒、裏側が茶色の麻布——を渡した。

それは三人分で十五円もする上等の中国服地であった。「ありがとう」と言ったが、「ウメちゃん」の月給が五円であったことにまで心は及ばなかった。長男を抱きあげて頬ずりした「ウメちゃん」の泣いて泣いて真っ赤になった目が、今になって胸に痛い。

昭和二十年八月十五日。日本は戦争に敗れた。私は一年半前に子どもたち二人を連れて日本に帰っていた。夫はシンガポール長期出張の帰途、広東で敗戦を迎え、在留邦人と共に広東の「収容所」に入れられてしまった。日本人たちは「収容所」で中国人に監視、命令をされるというこれまでもと逆の状態におかれた。その「収容所」に「ウメちゃん」が夜ふけにどこからかもぐりこんできた。そして夫に「コレアゲルヨ」と、小さい包を渡して暗闇に姿を消した。渡されたのは下着と少しの食物であった。

引き揚げてきた夫から「ウメちゃん」の話をきかされたが「そう。よく来られたわね」と言うだけであった。というのも彼女の心を思ったり、逆の立場であつたら私にあのようなことま

で出来たろうかと、深く考える余裕がなかったのだ。

敗戦後数年間の生活は過去も未来も、思い出も夢もなく、今日をいかにして生きぬくかということだけしか考えない毎日だった。

二合の米に道端で摘んだヨモギやサツマイモのくさったところまで入れておかま一杯のおかゆを炊きあげることに心を奪われていた。最小限度のものを残して、衣類は全部農家に運んで食料にかえたのもあの頃だった。二人の小さい子を連れて川の土手で一日がかりで摘んだ、「タンポポ」と「ツクシ」もゆでると手のひらにのる少量になった。

「もう少しせいを出してつかあさい」と、それを見た姑から言われて暗い物置きで泣いたのもあの頃。雑草のアカザはおひたしにして大ご馳走^{ちそう}だった。イモヅルも食べた。

こうした苦しい時代を切りぬけて、やっと人並みの生活にもどり、私もNHKの「婦人の時間」のレポーターの役を引き受けて働き出した。だんだんと今日の生活だけでなく、明日の生活を考え、昨日の生活を思う心のゆとりもとりもどした。

行方を案じていた広東時代の知人の陳さんも十三年ぶりで東京に姿を見せ、久しぶりに思い出話にふけた。

陳さんは、ホテルで中国人だということとでアメリカ人とは違った扱いを受けたと腹を立てていた。日本人の「アジア人」への意識の変わらぬことに対して手きびしい批判をした。その時、私は急に忘れていた「ウメちゃん」を思い出した。「ウメちゃん」の泣き声、真っ赤に泣きは

らした目。贈り物の「香雲紗」。菜心売りのおばさん呼びとめる声。そして危険をおかして「収容所」を訪ねてくれたこと。胸が重くなるように、こみあげるように思い出されてきた。

あの真心をなぜしつかりと受けられなかったのかと、じっとしていられない焦燥を感じた。呼吸が圧迫されるような苦しい思い出の数々であった。

私はどうしても一度「ウメちゃん」に会って、許しを請わなければおさまらないような気持ちになってきた。

「陳さん、私は広東で働いてもらった姑娘をさがしたいのだけれど、見つかるかしら。何か方法がありますか」と、たずねた。

「広東の時のね。むずかしいけれど、広東の中国人は日本が戦争で負けたあとで、たくさん台湾に渡りました。その中にいれば割に簡単にわかんと思うけれど。名前は何かといいますか？」

私はそこでまた、ハッと息をのんだ。

私は彼女の名前を知らない。正式の中国名を。知ろうとしなかった。先輩の奥さんにいわれた「ウメちゃん」だけですませていた。一年半も一緒に暮らしていたのに……。

日本の敗戦と同時にアメリカ軍が進駐してきた。ある日基地関係にアルバイトに行った甥がフン然とした表情で言った。

「アメリカ人は日本人に勝手にアメリカ名をつけてよぶ。ぼくは『ジョー』といわれるんだ」「胸に日本名のカードをつけなさいよ。『ジョー』なんてよばれて返事をしちゃだめよ。本当